

平成28年度 学校自己評価表

( 計画段階 ・ **実施段階** )

91

福岡県立鞍手高等学校長  
(全日制課程)

印

学校運営計画(4月)			評価(3月)		
学校運営方針	校訓「質実剛健 自学自習」、校是「たくましく前進者たれ」のもと、社会の変化に主体的に対応し、心身ともに健康で、五常の徳目を自己の生活規範となし、自らの可能性に積極的に挑戦する気概と叡智に富み、地域はもとより国際社会に貢献する人間を育成する ○学問を愛し、意欲的に学ぶ ○身体を鍛えて、強い実践力を身につける ○力をあわせて、美しい学校をつくる			A	
昨年度の成果と課題	28年度重点目標	具体的目標			
キャリア教育の根幹ともいえるべき分団制の充実や教育相談機能の充実、生徒会活動の推進で、活発な学校づくりを構築することができている。本年度は、SSHが5年目を迎え、SGHは2年目に入る。双方の取組の充実・深化を図り、学習活動のレベルアップをめざす。アクティブラーニングを含む授業改善や生徒との信頼関係を一層重視する教育を実践し、地域に信頼される学校づくりを推進する。	学習指導をより一層充実し、確かな学力の育成を図る。また、進路指導の充実により、高い志を持ち意欲的に学ぶ生徒を育てる。	生徒の学力向上に向け、研究授業・授業公開等を積極的に実施する。アクティブラーニングを充実させ、学ぶ意欲やチャレンジ精神等の向上を図る。総合的な学習の時間の内容の充実、高大連携の活性化を図るなどキャリア教育を充実させ、志を高め、第一進路希望の実現を図る。国公立大学100名以上、九州大学等10名以上の合格をめざす。			
	生徒相互及び生徒と教師との人間的な触れ合いの中で、豊かな人間性を育み、自律心と思いやりの心を持つたくましい生徒を育てる。	各行事等の教育的意義や期待される成果等を教職員で共有し、生徒の積極的な参加を促し、教職員・生徒が一体となって一つひとつの行事を充実させる。分団制を推進し、上級生のリーダーシップを発揮させ、自主性や集団への帰属意識を高め、生徒の生きる力を育む。また、元気な挨拶を励行し、鞍高宣言の主旨を浸透させ、いじめの撲滅を推進する。			
	SSH及びSGH事業を学校全体で推進するとともに、大学や外部機関との連携を深め、課題研究等をとおして、教育活動の更なる充実・深化を図る。	高大連携、研究機関・企業・地域との連携を積極的に推進し、SSH及びSGHの取組を充実・深化させ、生徒の主体的・自主的学習態度の涵養に資する。教科科目の学力向上のみならず課題研究においては困難な課題を設定し、グループで解決へ挑ませ、成果を認める「鍛ほめ福岡メソッド」を実践し、コミュニケーション能力・課題解決能力等の育成をめざす。			
評価項目	具体的目標	具体的方策	評価(3月)	次年度への主な課題	
教務領域	教育課程を改善する。	SSH・SGHの指定に伴い、探究的な学習を一層推進する教育課程を作成する。	A	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題研究をより効率的に実施できるよう、1年次の「現代社会探究」及び2年次の「総学」について時間割作成の工夫を行う。</li> <li>・アクティブラーニングを推進するために、各教科において、能力評価指標を作成する。</li> <li>・アクティブ・ラーニングの技法に関する研修を行い、さらなる授業改善を行う。</li> <li>・アクティブラーニングを主題とした公開授業を行う。</li> </ul>
	教務規定を改善する。	アクティブ・ラーニングを主題とした課題研究等、新しい学びのスタイルに対応できるように教務規定を見直す。	B		
	授業改善を図る。	アクティブ・ラーニングを主題とした授業研修を実施する。生徒の主体的な学びにつながる授業アンケートを実施する。	B		
	欠席や欠課の多い生徒を早期に把握し、対応する。	欠課時数報告書を活用し、教科担当からクラス担任に迅速に生徒の状況が伝わるようにする。	A	A	
	地域の人々に本校の教育活動を周知する。	魅力的な中学生体験入学や中学生保護者対象の学校説明会、公開授業週間を実施する。ホームページの定期的な更新をする。	A		
	情報機器を活用した授業を推進する。	生徒用情報端末機器やプロジェクターを活用した授業を推進する。	B	B	
	個人情報適切に管理する。	成績や生徒に関する情報を厳密に管理する。	A		

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価(3月)		次年度への主な課題	
生徒指導領域	教師のカウンセリングマインドに基づいて、生徒の元気で意欲的な学校生活を保障する。	教師が生徒一人一人に目を向け、生徒に自己肯定感を持たせ、自立の心を高めることができる生徒指導を推進する。	B	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・LHRの計画を見直し、学校行事に向けての取り組みを充実させるとともに、学年や学級の円滑な運営の時間にも充当できるようにする。</li> <li>・分団制の機能を一層強化し、上級生の指導力の向上を図るとともに、生徒の自己有用感を醸成する。</li> <li>・クラスマッチの内容に見直しを加え、十分な熱中症対策を施すとともに、分団の結束のみならず学級の結束を十分に深められるように再編成を行う。</li> <li>・文化部・運動部の一層の活性化を行い、文化部については鞍高祭を総合的な活動発表の場と位置付ける。運動部については、県高体連表彰2年連続優秀校の部1位を目指す。</li> <li>・真に「気配り・目配り・心配り」のできる生徒の育成を目指し、生徒・教職員の一層の意識改革を図っていく。</li> <li>・保健関連情報の伝達を確実に実施し、これまで以上に保健委員会の活性化を図る。特に、適切な事故対応を徹底するとともに、入念な感染症対策を実施する。</li> <li>・教職員・生徒の美化意識を高め、コンクール時はもちろん、平時の清掃活動の充実を図りたい。</li> <li>・人権同和教育特設HRの在り方を見直し、他の行事との関連を図りつつ、スリムで実効性のあるものに改訂していく。</li> <li>・いじめアンケートや面談等から、いじめの早期発見に努めるとともに、未然防止のための啓発活動を強化する。鞍高宣言もより生徒の心に響く形で継続実施をしていく。</li> </ul>	
		学校満足度調査において、学校満足度90%以上を継続する。	A			
	基本的な生活習慣の確立を図る。(時間厳守、挨拶、整理整頓)	生徒会や分団リーダーによるマナーアップ運動を展開する。(挨拶の励行)	B	A		
		全職員による生活指導、マナー指導を行う。(定期的に登下校指導等を行う。)	A			
	上級生のリーダーシップを生かし、生きる力を育む生徒指導を展開する。	75%以上の部活動加入率を継続する。	A	A		
		生徒主体の分団制による生徒会行事を通して共感的人間関係を育成する。	B			
	心身の健康を自己管理できる生徒を育成する。	教育相談委員会や学校医と連携して教育相談体制の充実を図る。	A	A		
		保健講話等による健康教育の充実やインフルエンザ等感染症の予防の徹底と迅速な対応を行う。	B			
	委員会活動を活性化し、美しい学校をつくる。	生徒への健康管理啓発活動を行いながら高等学校保健会での活動を積極的に行う。	A	A		
		全生徒・全職員による毎日の清掃活動による環境美化の充実を図る。	B			
	学校の教育活動全体を通して、様々な人権問題について理解を深め、実生活に活かせるように指導の充実を図る。	人権教育授業を充実させ、生徒に人権感覚を身につけることができるよう、指導の充実を図る。	B	A		
		生徒間の交流や学級活動を通して、より良い人間関係を築くためのコミュニケーション能力を養成する。	A			
生徒の実態を知り、素早い対応が取れるよう、アンケートや職員研修を充実させる。	毎月いじめアンケートを実施し、問題に迅速に対応できるよう努める。	A	A			
	校内職員研修会を実施し、職員間で情報を共有する場を設け、指導の充実を図る。	B				
進路指導領域	難関校を含む国公立大学100名以上の合格と生徒全員の進路実現を目標とする。	「上皆」を活用して、基本的な生活習慣を確立させる。	B	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進路実現に向けた取り組みが各クラス、学年において、当初の予定通り実施できた。特に、卒業生を招いての進路シンポジウム、職業人講演会、さらにSGH事業との連携で実施したフィールドワークや大学キャンパスツアーは、進路意識を高める有効な動機づけとなった。</li> <li>・課題としては、「上皆」の活用の仕方、1、2年次における進路情報の提供方法、SSH/SGHの取り組みとの連携、各教科の課題の効果、課外授業・土曜講座の科目のバランス、放課後自習室の運用方法、調整時間割の在り方等々がある。高大接続の流れの中で、推薦AO入試枠の拡大や探究型・教科横断型への問題形式の変容等、入試制度が変わろうとしている時期に当たり、さらに検討を加え、生徒たちが進路選択を適切に行えるよう、進路指導体制を整えたい。</li> </ul>	
		個人面談を頻繁に行い、学習面、学校生活面を両立できるよう促す。	A			
	生徒の実態を把握し生徒一人一人への指導を充実させる。	FineシステムやK-netを利用し、学習面の弱点等を認識させ、その克服へ向かうアドバイス等を行う。	A			A
		日々変化する情報をキャッチしながら、大学等の入試内容を研究し、生徒の進路指導にあたる。	A			
	SSHやSGHでの取り組みと「総合的な学習の時間」を融合することによってキャリア教育を充実させ、早期に将来の目標設定を目指す。	SSHやSGH事業と連携しつつ、招聘授業やシンポジウム、大学訪問を通して、大学へ進学する意義や意欲を高揚させる。	A			A
		冊子、インターネット等を使って、学部学科研究を深めさせる。	B			
		インターンシップを多く取り入れるよう努めたり、社会人シンポジウムを開くことで、職業観を育成する。	A			
効果的な課外授業や土曜セミナー、模擬試験を実施し、さらなる学力向上を図る。	課外授業や土曜セミナーを有効的に実施し、授業の補充を充実させる。	A	A			
	模擬試験の結果を分析し、生徒の進路志望や学習への取り組みを強化させる。	A				
	各学年とも1年間で国数英の3教科の学力到達度をB1(国公立大学合格レベル)以上になるよう、模試の結果を分析し、課外授業等を充実させる。	A				
庶務課	諸行事の円滑化・効率化を図るための事務的処理を行う。	学期ごとに庶務課会議を持ち、各学期に行う作業の分担・手順の確認を行うことで、無駄のない事務処理を行う。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各学期の最初に庶務課会議を行い作業分担や手順の確認をおこなったのは大変効果的であった。</li> <li>・PTA役員会、理事会を通して学校の現状について情報発信を行うことができ協力体制がとれた。</li> <li>・年度当初の目標については概ね達成しているが、庶務としての役割をさらに果たすために今後職員の潤滑油としていろいろな業務を円滑に行えるように事跡や文書を丁寧に残していきたいと考える。</li> </ul>	
	PTAとの連携を密にし、各種委員会活動の充実を図る。	PTA役員会、理事会を通して、適宜情報を提供することで、学校の現状を理解いただき、よりよいPTA活動を行えるようにする。	A			
	文書・情報の整理、保管並びにその改善を図る。	常に閲覧・利用が可能な職員会議録、運営委員会議録を作成し、前年度と比較、参照できるようにする。	A			
	職員室の整備等、職場環境の充実をはかり、職員の福利・厚生に努める。	職員室・更衣室・下足ロッカー等の整備を行い、整った状態を保つことで、気持ちよく仕事ができるようにする。	B			

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価(3月)			次年度への主な課題
理数科	理数科の独自性の確立及び学年・教科・各分掌との連携の強化を図る。	理数科委員会を活性化する。特にSSH課との連絡を密にし、理数科独自の行事の充実を図る。	B	B	B	・次年度SSHの継続がなされるかという点が大変重要である。継続されれば今まで通り様々な活動を行い生徒の探究する力を伸ばす努力を続けていきたい。継続されない場合でも大学との連携等は継続し、課題研究の充実を図りたい。 ・東京筑波研修の実施に関しても他行事との組み合わせ等を考え新しい形態での実施を検討したい。 ・大学入試に関しても理数科の3年間の活動を活かした入試形態へのチャレンジも学年と連携をとりながら模索していきたい。加えてSSH部の中心となる理数科の生徒の育成も重要である。理数科の特色を活かせるよう情報交換を密にし生徒の指導を行いたい。
		LHRや、課題研究を十分に活用して、将来の研究者や技術者としてのキャリア教育を行う。	A			
		2年生東京・つくば研修、1年生福岡研修の実施方法を再検討し充実をはかる。	B			
	中学校や地域に対する広報活動を充実する。	SSH課と連携し、理数科独自の行事や活動内容、および実績を中学校訪問を通して伝える。	B	B		
		課題研究や課題研究の内容、成果を理数科通信やパンフレット等を利用して広報する。	B			
	進学実績の向上を目指す。	SSH課と連携し、SS総合コミュニケーションで行う課題研究の質を高め、生徒の進路意識を高める。	A	A		
難関理系大学・医科系学部を含む、難関大5名、国公立大学理系への進学30名以上を目指すために、1, 2, 3年の理数科で情報交換や連携を図る。		B				
人間文科コース	人間文科コース生徒の基礎学力の定着、応用力の向上を図り、コースの特性を活かしながら進路の実現をめざす。	各教科で習熟度別授業・少人数授業を展開し、基礎学力の向上を図る。またコース独自の授業を活用して文系科目の強化を図る。	B	B	A	・1年生は各学校行事や授業を通して人文の一員としての役割を自覚しつつあると考える。 ・2年生はSGH事業としての課題研究及び京都・海外研修を通して、広い視野をもち客観的に物事を考え、また自己の意見を他者に説明する力や発表する力が培われている。また、様々な活動に積極的に取り組む姿勢も見える。 ・3年生は推薦入試・AO入試において小論文・自己PR等で培ってきた力を発揮している。 ・今後は、SGH事業3年目の中間発表に向けて、人文コース全員がそれぞれの行事において中心的役割を果たすことができるよう取り組んでいきたいと考える。
		課題研究でのグループ討議・論文への取り組みや海外研修での経験を活かし、推薦・AO入試に積極的チャレンジし、国公立大学10名以上の合格をめざす。	B			
	SGH事業との連携をよりすすめ、各セミナー・海外研修・課題研究の在り方・内容の充実を図る。	国際学生や留学経験のある卒業生との交流を通して広い視野を身につけさせ、また、自分の意見を主張できるようなプレゼンテーション能力を養う。	A	A		
		SGH事業と連携しながら課題研究等の充実を図り、生徒間において自己の意見をはっきりと述べる力を育成し、SGH事業の核となる取り組みを行う。	A			
	大学との連携や校外へのPR活動を活発に行い、コースのレベルアップに努める。	各セミナー・課題研究を通して、大学との連携を図り、生徒自らが考え、行動できる力を育成する。	A	A		
		人間文科コースの活動内容をまとめ、行事等を通じて校内においてもコースに対する理解を深める。	B			
SSH課	理数科目を中心とした独自のプログラム開発により、将来の科学技術系人材育成を目指す。	学校設定科目を積極的に活用して、理数科目に関する興味・関心を高め、高い学力を養成する。	A	A	A	・SSH最終年度となり、安定した行事などへの取り組みが行えた。理数科目に関する興味関心を喚起することができていると感じる。大学との連携も進み、更なる様々な可能性も見えてきている。一方で、企業を含む研究機関との連携は思うように進んでいない。 ・対外広報については、HPおよび学校紹介パンフレットでの広報にとどまってしまう、SSH独自の広報誌の作成ができなかった。 ・海外研修を行い、その内容を生徒に向けて紹介するなど、英語によるコミュニケーションの必要性を発信することができた。科学英語については更に取り組みを行っていく必要がある。
		校外研修や講演会を積極的に実施して、SSH事業の目標達成と全校体制で幅広い総合力を育成する。	A			
		大学や他の研究施設との連携を推進し、より独自性と発展性を高めた理数教育の実現を図る。	B			
	地域の科学教育に貢献するとともに、本校教育の魅力についての理解を広げる。	地域の小・中学生等を対象とした公開講座等を開催し、理数教育ネットワークの構築を図る。	A	B		
		HPや広報誌等で、SSHの取組を校外へ積極的に広報する。	B			
	科学英語に関する総合的な取組みを通して、国際的に通用する研究者の養成に努める。	学校設定科目や海外研修等を通して、国際的なコミュニケーション能力の育成を図る具体的な取組を行う。	A	A		
ポスター発表やプレゼンテーションを通じて、英語による情報発信能力を身につけさせる。		B				
SGH課	課題研究推進体制の構築	学年と連携して現代社会探究及び課題研究Ⅰの推進体制を構築する。	A	A	A	・1年生現代社会探究および2年生課題研究の運営について企画責任者の先生を始め、学年の先生の協力を得ながら進めることができた。 ・現代社会探究については、昨年度の反省も踏まえ、時間にゆとりをもって進めていったが、今年度から始まった2年生の普通科における課題研究について、時間の確保が難しかった。この点については、先生方の意見を聞きながら、改善を加えていきたい。 ・能力評価指標については、年度初めと年度終わりにとる実践活動カールブリックの分析を進め、生徒にとっては自己把握、先生方にとっては生徒把握になるよう還元していく。
		SSH課と協力して文系生徒・理系生徒双方に通じる課題研究プログラムを作る。	B			
	高大連携・地域連携ネットワーク作り	大学との連携を深め、課題研究の内容を充実させる。	A	A		
		自治体の協力および地域を巻き込んだ活動を展開する。	A			
	能力評価指標の作成	北九州市立大学地域創生学群と連携し、評価指標の検証を行う。	B	B		
		生徒の活動の観察及び生徒成果物の分析を通して、ルーブリックを作成する。	B			

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価(3月)		次年度への主な課題
1学年	活気に満ちた規則正しい学校生活	安易な欠席・遅刻をなくし、年間出席皆勤145人以上を目指す。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・出席皆勤者も120名程度であり、当初目標を下回った。安易な欠席ではないだろうが、もう少し出席するという点に強いこだわりを持って欲しい点があった。</li> <li>・各集会においても迅速、かつ静粛な集合ができてつあるが、もっと徹底することで新1年生の模範としたい。</li> <li>・生徒たちは高校生として自分なりの学習習慣を模索した1年だったが、確立されつつある生徒が大半である。しかし、学習時間に物足りなさはあるので、時間を作る工夫を促したい。</li> <li>・難関大学10名を学校として目指すならば、学年ではなく進路指導領域を中心とした模擬試験の在り方も考える必要がある。</li> <li>・課題研究も調べることにとどまり、それを通して自己の将来像を描かせるまでには至らなかった。ただ、活動そのものには真面目で、協力的な生徒が多かった点は評価できる。</li> </ul>
		元気な挨拶と時間厳守を励行する。	B		
		部活動加入率80%以上を目指す。	A		
	自ら学ぶ、共に学ぶ姿勢の育成	家庭学習の習慣化(自ら学ぶ)	A	A	
		課題研究を通して新たな学びを定着させる。(共に学ぶ姿勢の育成)	A		
		校外模試の早期分析し、活用する。	A		
よさに気づき、よさを育む	現代社会探究を通して社会を知り、自分を知り、学問を知り進路意識を高揚させる。	B	B		
	相互評価による高め合いを通して、相互理解を図り自他を尊重する精神を養う。	B			
2学年	基本的な生活習慣を確立させ、自立のための自律を可能とする力を育成する。	安易に欠席しない雰囲気づくりを行い、出席皆勤への挑戦を奨励する。	B	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安易な欠席ではないが、欠席者は多かった。万難排して毎日登校してくるたくましい生徒を、今後も粘り強く育てたい。</li> <li>・基本的な生活習慣や容儀を整えることについてはほとんどの生徒に問題はないが、中には思いもよらない身勝手な行為をする生徒も未だにいるので、こちらも粘り強く公共性を育てたい。</li> <li>・学力形成については、結果を見れば不満が残る。来年の進路実現を可能にするためには今年度の学力伸長がもっと必要だったが、不十分な結果となった。</li> <li>・高学力層において部活動と勉学との両立がなしていない生徒も多いので、このフォローをもっとするべきであった。</li> <li>・色々な百周年行事を活性化するリーダーとなる生徒は育ててきた。しかし、もっと学年全体で百周年のタイミングを身近に・誇らかに感じ取り、主体的に較高の活性化に関与したいと考えるような生徒を育てたい。代表生徒による討論会など、何か生徒たちが百周年を具体的にイメージするための企画を考えたい。</li> </ul>
		高校生としての適切な言葉遣いや、元気な日常の挨拶を徹底させる。	A		
		定期考査ごとに頭髮検査を実施し、校則を遵守する態度を育成する。	A		
	授業がすべて、1時間1時間の授業の中で必ず理解を深めさせ、進路実現に結びつく学力を形成させる。	「伸びる」のを待たず、「伸ばす」授業を必ず展開する。	B	B	
		さまざまな学びの場面を作り出し、主体的に学ぼうとする生徒集団を形成する。	B		
		面談や進路学習・校外活動を通じてそれぞれの生徒の適性を顕在化させ、具体的な進路目標を持たせる。	A		
部活動・生徒会活動・学校行事への積極的参加を推進する。	全員参加の学校行事に主体的に取り組ませ、学校や学年への帰属意識を高めさせる。	A	A		
	学校行事や部活動等を通じてリーダーシップやフォロワーシップを体得させ、理解させる。	B			
	来年度のリーダーを発掘し、来年度の各種学校行事に新たな風を起こせる人材を育成する。	A			
3学年	学校をリードする人材の育成	下級生の模範となる生活態度で学校生活を送らせる。	A	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・分団長を中心に、各分団で学校行事を主体的に動かすことができた。また、学年の生徒や教員の協力体制もしっかり構築され、学年全体で学校をリードするという意識のもと動くことができた。</li> <li>・継続的な指導で、自分の進路実現のために努力する意欲を高めることができた。課外や模擬試験の受験状況も良好で、最後まであきらめない気持ちを持つ生徒が増えてきた。</li> <li>・模試の分析や面談の機会をもっと増やすべきであった。難関大を目指す生徒のためにできる手立ては、進路指導領域と連携してもっと効果的な方法を考えていかなければならないと感じた。</li> </ul>
		学校行事を通じて学校全体をリードするリーダーを育てる。	A		
		学年全体でリーダーをバックアップする意識を育てる。	A		
	自己実現につながる学力の向上	積極的に学習に取り組めるための学習環境を整備する。	A	A	
		放課後課外、放課後学習、勉強合宿を通じて学習への意欲・意識を高める	A		
		基礎力・実践力を育成するための授業・学習指導の質を向上させる。	B		
全員が第一志望に合格し、難関大10名、国公立大学100名以上の合格者を実現するための指導	面談を効果的に使い生徒理解を行い、生徒に高い目標を設定させる。	B	B		
	進路講演会、「総合的な学習の時間」を利用し、進路実現へ向けた意識を高揚させる。	A			
	模試の検討・分析を行い授業や課外の講座に生かす。	B			